

八幡宮跡を訪ねて（塩津）

武田信玄の南進にも利用されたという旧伊那街道（中世に使われた伊那街道）を歩いてみました。塩津温泉にある諏訪神社の南方百メートル程の街道沿いに、石造りの鳥居があります。



鳥居と立札

脇の立札にはこう記されています。

八幡宮遥拝所

御殿山の険しい山腹に建てられた「八幡宮」を

参拝するのは容易ではなかった。そのため鳥居のみをここ「洞（当地の字名）」に遷し

この鳥居から八幡宮を正面に見据えて

参拝を代用することができる遥拝用鳥居として

八幡宮は文禄二年（一五九三）創建後

再建・遷座・合祀を辿ってきたが鳥居だけは当時のまま

八幡宮遥拝所の姿を留めている

跡地には

神殿・拜殿跡、石段、手水鉢等の遺構が残る

「険しい山腹に建てられた八幡宮」に何か惹かれるものを感じ、いつか行くぞと決心をしました。

半年後、文化財保護審議会委員の加藤博俊さんの案内で、八幡宮跡を訪ねる機会を得ました。

塩津天神社のほぼ真東にある沢から八幡宮を目指して山に入りました。設楽町誌（村落誌）

に記された地図からは「沢を外さずにその最深部まで進めば八幡宮に至る」と読めます。歩みを進めると沢がいくつも現れ、

どれが地図の示す沢なのか分からなくなりました。歩く斜面は三十度以上の急斜面。斜面にへばりついて喘ぎ喘ぎ半歩ずつ進みます。

人が通った形跡は全く見当たりません。「八幡宮を参拝するのは容易ではない」まさにその通り。ロープで身体確保をする場面にも出くわして登ること二時間半、稜線を間近に臨む薄



石段

暗い林の中の八幡宮跡に辿り着きました。

神殿跡・拜殿跡は狭い平坦地となつていますが建物の痕跡はありません。

手水鉢は静かに鎮座しており、刻まれた寄進者の銘を読み取ることができません。

石段は急斜面に整然と真っ直ぐ積み重ねられて神殿跡に向かつて伸び、天にも上るかと思われる体です。

神殿跡は大きな岩壁の直下にあつて、社殿は巨大な屏風あるいは光背を背負っているようだったのではと連想されました。



手水鉢



神殿跡と岩壁

こんなに高く、こんなにも険しい場所にお宮を建てた当時の人々は何を思い描いていたのだろう。この場所に建てた背景にあるものは何か、想像を駆り立てられます。

さて、案内してくださった博俊さんは文献資料や聞き取りに基づいて現地調査を行い、八幡宮跡の場所を特定されたそうで

す。一回の調査では八幡宮を発見することができずに複数回の調査を行い、長時間林内を彷徨つてようやく場所を特定することができたと言われます。

ここ数十年の間、誰も訪れることのなかったはずの場所ですから、発見に至るまでの苦労は大変なものであったと想像されます。博俊さんの熱意と行動力に敬意を表するとともに、貴重な文化財の存在を私たちに知らしめてくださったことに感謝しなければなりません。

人が足を踏み入れない（踏み跡が無い）、風雨による浸食や崩落で地形が変わる、植物の生長や気候の変化によつて景観が変化する、これらはそこにある事象を見つけにくくする要因となります。初の八幡宮跡探訪から一年後、単独で山に入った私は辿り着くことができずして。案内された道筋の記憶が薄れていることや、大小の雑木などによる景観の変化に惑わされたためです。記憶を薄れさせないため、時々の変化を把握しておくために、年に一度は必ず現地を足運んでおくことを実行したいと思っています。

（設楽町文化財保護審議会委員

後藤 禎光